

和歌を含むものの存在する『本朝女鑑』に顕著なように、殊に王朝の時代の和歌を引くのが目立つ。そしてそれらの和歌は、主に情緒や機転の面において大きな効果を發揮する存在として描かれており、どのような場面でもどのような素晴らしい和歌が詠まれたか、あるいは和歌がどのような役に立ったかが示されていることが多い。それは、このような女訓書に多く記される和歌の実例として示されているものであろう。

一方、『野加伊之牛』の中心になっている百首の和歌はいずれも心得を凝縮した教訓歌で、その後に解説を付して更に教訓を示すのが基本的な形式となっている。私は百首の内の多くが作者自身の作であるとみているが、これらの和歌はあくまで心得の要約であって、和歌の徳の用例ではない。また、解説部分に引かれる和歌の中には八代集等と共通するものも見受けられるが、伝統的な女訓書に色濃く、同時代のものにも已然として残る、王朝の雅な和歌を尊ぶ雰囲気は、この作品には目立たない。

なお、教訓の配列については傾向の似たものが並べられているとみえる部分もあるが厳密ではなく、随筆的に綴られたような印象を受ける。これは『迪吉録』による『鑑草』や抄録意識を合わせた『女四書』、それに『列女伝』に倣った形式の『本朝女鑑』などの、中国の書物の強い影響下に成った作品の持つ厳密な項目立てによる構成とは大きく異なるものであり、どちらかといえば中世の女訓書の様式に近いものである。また、独自の教訓歌を中心とした構成という点では、正保四年刊の『梅草』の中巻に収められる、ある母親が娘のもとへ遣わしたという八首の教訓歌と同様であるが、それが和歌のみを並べて末尾に文章を少々付したものであるのに対して、こちらは先に述べた通り和歌の大半がそれぞれに解説を有するので、やはり大きく異なる。また、いろは歌の類のように、歌の並び方に法則性がないのも先述した通りである。

このようにみてみると、まず心得の凝縮たる独自の教訓歌が存在し、基本的にそれを詳しく解説する文章の付随する構成となっている点、それに中世の女訓書以来の、王朝的な古歌を尊ぶ傾向を脱却している点において、和歌を中心とする作品であったも、『野加伊之牛』は同時代の女訓書と比べて多少独特な形式を取っていると言えるのである。

次にその教訓の内容についてみてみると、まず古い時代の女訓の伝統の影響下にあると考えられる部分がある。

たとえば『野加伊之牛』には、公私で気をつけるべきは心構えと言葉遣いである(十四首目)、姿よりも心こそが重要である(十六首目など)などと心の持ち様についての教訓が目立ち、一首目の教訓歌にも「思へた、世をうつ蟬の心はへ」と心の話題がみえ

るのだが、これは伊藤敬氏が『庭訓』などの中世の女訓書の共通点として挙げる、「最初に「心づかひ、心もち」の大事さを説いている点」に近い⁵⁾。また、自分の心を見張るべきことや心を水に例える話題のみえる『女訓抄』、「心のもち様の事」を説く『本朝女鑑』などの同時代の作品とも相通するものがある。

また、『野加伊之牛』の教訓の中には、普段の生活における用心や人間関係での心構えなど、男女共に通用する話題が多く存在する他に、自立して我が身を養うべきこと(七十五首目)や奉公の心得(七十七首目)などむしろ男性のためとみえるような内容のものもみられるのだが、これも宮仕をする時代の女訓の遺風と考えられる。

この他に、着物や化粧から態度に到るまで万事控え目を良しとする傾向は強いものの、女性を低くみる表現の少ないこと、⁶⁾『伊勢物語』・『源氏物語』(この二つは文中にしかと名が示される)を利用してのこと、また仏教的要素の散見されることなどは、中世及び同時代の女訓と同様である。

なお、同時代の女訓書には実用的な生活の知恵を具体的に示すものもあるが、それよりも心の持ち様や生活態度にひたすらに重きを置く書きぶりはこの作品に特徴的な点である。また、軽率な発言のいましめ(三十五首目)、人の言の揚げ足を取るこのいましめ(七十九首目)など、言葉(ものの言い方)についての教訓が多いのは、独特で新しい傾向かと考えられる。

また、和歌についての教養に目を向けてみると、『女訓抄』や『女郎花物語』のように和歌の徳を強調し、作法、用語、著名な詠み手などについて長い説明をしたり、読むべき書名を具体的に挙げたりという、中世の女訓書的な傾向は見当たらない。

しかし、「若き身に花をさかする読かきそ老て心のととも成ぬる」(二十首目)、また「哥双子心にかけぬ世の人のいかに寢覚のさもしかるらん」(二十二首目)、「よむ双子身のいましめと思はずハ只たはことの反古也けり」(二十三首目)とあって、和歌と読書に親しむべきこと、取るに足らない書物からでも様々なことを読み取るべきことを説く一群の教訓歌が存在する。なお、これらの歌の間にある二十一首目には「なしとげでならぬならじといふ人ハ是社物にならず物なれ」とあり、並べてみると、学問によって積極的に教養を身につけることを勧めていると読める。

どちらかというと言書の教養に重きが置かれているらしいこと、また勧める読書の方法が独特であることが特徴的であるが、ここには和歌への言及も確かに存在している。また、王朝のものを尊ぶ傾向はないものの、和歌の引用が作品中に豊富であることから、和歌の教養という古い時代の女訓から続く伝統がここにも見て取れると言えよ

う。

以上から、『野加伊之牛』は和歌を中心に叙述するという近世前期の女訓書の傾向をまぎれもなく有するものであるが、教訓歌に文章が付随するという独特な形式を取っており、また伝統的な和歌の教養は受け継ぎつつも王朝の風は脱却しているように、教訓の内容には古い女訓に通じる要素があると共に、作者独自の新しい物の考え方も反映されていると考えられる。その形式からしても内容からしても、作中に和歌の果たす役割は大きいと言えよう。

二 和歌の出典

さて、『野加伊之牛』の教訓の解説部分には先述の通り引用が多く、豊富な先行作品をもとに形成されていると考えられる。中にはその作品名や関わりのある人名を示している場合もあるが、出典が明記されない場合も多い。それらの典拠を探ることからはこの『野加伊之牛』作者正行の読書範囲が垣間見えて面白く、また、娘に対する教育の意図、ひいては当時の生きた女子教育の特色の片鱗がうかがわれるという点で意義があると考えられる。つまり、すでに板本の女訓書が出現し始めていた時代にわざわざ独自に書き上げられた女訓書たるこの作品に、どのような書物が相応しいものとして選択されているかという視点からその典拠を探るのは、非常に興味深いと考えられる。

ここではその典拠のすべてを明らかにすることはできないが、本作品が和歌を中心に構成されるものであり、また伝統的な「哥」の教養についても言及のあることから、和歌に関わる複数の引用の源と考えられる二つの作品を取り上げて以下に論ずることとする。

①『伊勢物語闕疑抄』との関わり

先述のように本作品には和歌に解説を付す形式で心得が説かれているが、その四首目は堪忍についての話題で、以下の通りである。

堪忍の只二もしの玉章ハいもせの川の絶ぬ水上

女ハ堪忍性のあるやうにしてなき物也

半天にたちる雲の跡もなく身のはかなくも成にける哉とよめるもかんにんのかみなくてあからさまに家を出後悔しての哥也源氏品さためにもミつからひたいかみ

をかきさくりてあへなく心ほそければうちひそみぬへかしのふれと涙こほれぬ
れは折くことにえねんしえず悔しき事もおほかんめりなとあるも堪忍の性のな
くて人の心を見んなど思ひはかなく身をかくしてなかきわかれと成ての事なりこ
れをしもの品にさためられたり

古きことに 夫妻忍之則終其世不忍之則令子孤也

右のように、この「堪忍」に関する記載は、『伊勢物語』二十一一段の男のもとを去った女の歌の引用・源氏物語 帚木巻のいわゆる「雨夜の品定め」からの引用・漢文（未詳）の引用の三つの要素から成るが、大部分を占める『伊勢物語』・『源氏物語』の話題の直接の典拠は、『伊勢物語闕疑抄』であると考えられる。

よく知られているように、この細川幽齋による『伊勢物語』の古注は写本・板本で広く流布しており、『野加伊之牛』成立年次と思しき慶安二年以前にも、数種の板本が認められる。諸本の内容に大きな異同は見当たらないものの、引用の「半天に」の和歌の表記から、『野加伊之牛』作者が用いたのは古活字十行板か古活字十二行板のいずれかであると考えられる。ここではひとまず古活字十行板を以下に示すこととする。関連の認められる部分のみを挙げる。

むかし男とかしこくおもひかハしてこと心なかりけりさるをいかなる事かありけ
んいさ、かなる事につけて世中をうしと思ひて出ていなんとおもひてか、るうたを
なんよみてものにかきつけける

かしこく思ひかハして能思ひあひたる中なり末に恋する事をいはんためいさ、
かなる事につけて少の事に家を出んとする女の堪忍なき性なり
いて、いなは心かるしといひやせん世の有さまを人ハしらねは

夫婦の間の恨ありて堪忍しかたき事のあるをハ世の人ハしらて我心かるき物とい
ひやなさんといへるさまなりいさ、かのことにつけてハ女の堪忍のなくこ、ろか
ろきといはん首尾なり

(中略)

この女いとひさしくありてねむしわひてにやありけんいひをこせたる

男のかへれといひやすらんとおもへともさもなし程ふるにしたかひて後悔して
これを読んでやる哥也愚見には念しわひハ思ひわひてなりとあり上の詞にいさ、か
なる事に家出せしも堪忍性のなきによりて也今更男のかたへ哥などを読んでくる
もおなし心なり

(中略)

かへし

半天にたちある雲の跡もなく身のはかなくも成にける哉

女の我心をくはんしてよめる哥成我心かくくしてさしもなき事に出ていにしかさ
らハ其ま、もなくて又堪忍もせてたちかへりたるハ雲のねもなく半天にた、よふ
ことくなりといへり

とはいひけれとをのか世々ににけれはうとくなりけり

をのか世々離別してをのれくの世々なるをいふうとく成にけりはいもせのちき
りもなくなるをいふ也私曰は、木々の局品定の所にえんにものはちしてうらミい
ふへき事をも見しらぬさまに忍ひてうへはつれなくみさほつくりて心一つにおも
ひあまる時ハいはん方なくすこきことの葉あはれなるうたを讀をさしのはるへき
かたミをとめてふかき山里世はなれたるうミつらなとにハひかくれぬかしとあ
りまた此末に人の心を見しらぬやうにけかくれて人をまとハし心をもミんとす
るほとになかき世のものおもひになるいとあちきなき事也心ふかしやなどほめた
てられてあはれす、ミぬれハやかてあまになりぬかし思ひたつほとはいとこ、ろ
すめるやうにて世にかへりみすへくもおもへらすいてあなかなしかくはたおほし
なりにけるよなどやうにあひしれる人きとふらひひたすらにうしともおもひはな
れぬ男き、つけてなミたおとせハつかふ人ふるこたちなと君の御心ハあはれなり
ける物をあたら御身をなといふミつからひたひかミをかきさくりてあへなく心ほ
そけれはうちひそミぬかしのふれと涙こほれぬれハおりくことにえぬんしえ
すくやしき事もおほかめるにほとけも中々心きたなしと見たまひつへしなとかき
たりこれも前後女の勘忍性のなき故なり

(後略)

一見して明らかなように『伊勢物語』二十一段と『源氏物語』の「雨夜の品定め」を
並べて論じる点が『野加伊之牛』と共通しており、またそこには「堪忍」というキーワ
ードも存在し、表現に類似が認められる。¹¹⁾『伊勢物語闕疑抄』に先駆ける『伊勢物語首聞抄』、
『伊勢物語惟清抄』などもこの二十一一段の解説に「堪忍」の語を用いているが、この
ように繰り返してはいない。また「雨夜の品定め」との比較は先注に見当たらない点
である。

また、引用の和歌において「なかそら」を「半空」ではなく「半天」と表記する点、
そして「半天」・「雲」・「跡」・「身」・「成」・「哉」を漢字で、その他の部分を仮名で表
記する点に完全な一致がみられる。この表記は先にも触れた通り古活字板の特徴であ

るので、『野加伊之牛』形成に当たって参照されたものは、『伊勢物語闕疑抄』の早い
段階での出版物である古活字板であった可能性が高い。

次に、『野加伊之牛』九十二首目の、老人を敬い若人を憐れめという話題をみてもみる。
老たるを親とうやまへ若きをはなへて我子と思ひあはれめ

おいたるをなへてうやまへは其中にわか親をうやまふ事こもれりわかきをひとつ
にあひすれハ則我子をあはれふ事こもれる也業平の御母伊登内親王の御哥の返し
に世中にさらぬわかれのなくもかな千よもといのる人の子のため 我一身のうへ
をはいハすして世間の人の子たるもののためにおやの死するといふ事なくてよ
からん物をとひろくいひたまへり則其うちになりひらの母を悲しみ給ふ事こもる
也是目連尊者の御は、のためにうらほんを行ひ給ふ同し御心さしなり

これは「世中に」の歌からして、同じく『伊勢物語』八十四段を利用していることが
明らかであるが、そこで具体的な名の示されない母親を「業平の御母伊登内親王」と
するのは、「身はいやしなから母なん宮なりける伊豆内親王の御事也」という『伊勢物
語闕疑抄』の解説によるものと考えられる。また、「世中に」の歌についての解説は、

世中にさらぬわかれのなくもかな千世もといのる人の子のため

我一身のうへをはなけかすして世間へかけていふなり死するといふことのないも
あれかし一切衆生の子たる物のためよからんと也此うちにわれも則こもれり目
連の我母のために孟蘭盆を行れしも此同心なり

とあり、『野加伊之牛』が表現を変えただけでこの内容をほとんどそのまま利用してい
ると分かる。目連の話題も他の典拠によるものではなく、同じく『伊勢物語闕疑抄』
によるものと知れる。

この他に、十五首目の化粧の心得の解説には「伊勢物語にもいとようけさうしてとか
けり」と『伊勢物語』二十三段の引用があり、三十四首目の教訓歌「思ふこといはてた、
にとよめる世によしなの人とはす語や」は百二十四段の「おもふこといはてそた、
にやミぬへき我とひとしき人しなれば」の本歌取りとなつてゐる。この二例も直接
には『伊勢物語闕疑抄』を参照したものであるかもしれないことを言い添えておく。

先行研究に指摘されているとおり、流布や利用の状況からみても、三条西家流を基
礎に諸注の粹を合わせて成った『伊勢物語闕疑抄』は、近世初期において『伊勢物語』
研究の権威として扱われ、多大な影響力を持っていたものと考えられる。¹²⁾よって『野
加伊之牛』における『伊勢物語闕疑抄』の利用は、意識的に選択されたものと推測さ
れる。

②小倉実澄の和歌との関わり

小倉実澄(永享十一〜永正二)は本姓は源、字は正綱、近江国蒲生郡佐久良城主で、京極佐々木氏に仕えた武将である。左近将監。一条兼良や五山僧らと親交があった。応仁の乱の最中、学僧を多く迎えて五山文学の伝統を守ったことが文学史上特筆される。現存する著作はみな写本で伝わるものであり、犬追物や笠懸についての武芸の書が残る一方で、漢詩文・連歌・和歌の作も存在する。和歌は『江北記』に『三十六首和歌』と『留守警策七首和歌』が収められ、また『蒲生智閑和歌集』の詞書からはたびたび歌会を催していたことが伺われる。なお、現存しない家集に『昨薄残葉集』なるものがあつたらしい。横川景三による延徳二年の実澄の寿像賛には「平生所作歌詩、成巻軸者曰昨薄残葉」とあり、またこの集の自筆跋文が現存するらしいので、存在していたことはほぼ確実と考えられる。

さて、『野加伊之牛』の五首目の教訓歌、夫婦仲を説く「いとせの中よからぬハ外の聞あしくて内ハと、のひもせず」の解説部分の中に、小倉実澄の名を見出すことができる。この解説は四つの話題から成る長いものであるが、そこに小倉実澄の作とされる和歌が引かれている。

江州小倉将監実澄の哥に

めとおと八月よ花よと思ひなせさりとて人にくまれハせじ

ここに示される「江州」(近江国)も「将監」も、小倉実澄の説明として誤りがないと考えられる事項である。これも何かの書物から引き写したと思しきものであるが、彼の作品とされるものの中にこの和歌をみつけることはできない。先述した『三十六首和歌』と『留守警策七首和歌』は共に教訓的な内容の歌であるので、やはり教訓的なこの「めとおとハ」も、記載のとおり実澄作である可能性は高いかとも考えられるが、証拠となるものはない。

しかし、実澄の名は記さないものの『三十六首和歌』からの引用と考えられる和歌が、『野加伊之牛』には二首存在する。それは座におけるいましめの三十一首目、己の心を律せよと説く六十首目の教訓歌の解説部分に、それぞれ見出すことができる。

人おほき座敷ともなく思ふとちさ、やく事ハえせもののかせ

くかいをもしらす人中へも出つけぬ人ハ人有所にてもをのかおもふとちかたより
てさ、やく也座につらならハなへてのあいさつすへし 或人の哥に

さかつきをさ、れん人のかたわきにひまありがほに物かたりすな

(三十一首目)

千疋ハはねくるふとも一疋も心の駒に手綱ゆるすな

一疋くるへは千疋くるふといへりそれハ心なきむまの事なり人としてちくるいに
同じからんや幾疋くるふとも我心の駒のつなてをゆるさずしてあしをみたさすへ
からす或歌に たハふれを人のいふをハうちわらひ我がたよりハなさてつ、しめ
(六十首目)

それぞれ「或人の哥に」「或歌に」とあつて出典を明記されない和歌が、小倉実澄の『三十六首和歌』からの引用と考えられるものである。

まず、教訓歌三十一首目に引かれている歌は、『三十六首和歌』の十首目、
盃をさ、れぬ人のかたかけにひま有顔に物かたりすな⁽²⁰⁾
という歌とほぼ同一である。

また、教訓歌六十首目に引かれている歌は、同じく『三十六首和歌』の二十六首目、
されことを人のいふをハ打笑我かたよりハせしとたしなめ
とこれまた同様である。

以上のように、『野加伊之牛』には「江州小倉将監実澄」の名が示される出典不明の和歌があり、また『三十六首和歌』の和歌が利用されていると考えられるが、実澄の著作がみな写本で伝わっていることもあつて、具体的に何の本から引用されたものかは不明である。『江北記』あるいは『三十六首和歌』の写本と、「めとおとハ」「さかつきを」「たはふれを」の三首すべてを収める作品が存在した可能性もある。ここで思いあわされるのは現存しない実澄の家集『昨薄残葉集』の存在であるが、これも内容がまったく伝わらない以上、関わりがあるかはわからない。また、『野加伊之牛』には右に挙げた二首のほかにも出典が明記されない和歌がいくつか引かれているが、その中に未知の実澄作品から引用されたものがある可能性もある。しかしこれも想像の域を出ないものである。

もし『三十六首和歌』からの引用であるとすると、これは内容が教訓的な性格のものであるため相応しいとして採用されたものかもしれないが、「読書の殊更なるハ弓やり急度注進きつと回文」、「知行分もたぬ身ならハ出家して安楽国のしゆごとのとなれ」などの歌もあつて全体を通すと男性(武家)の心得と読めるこの作品から、うまく女訓書の内容に沿うよう選んで文章をまとめているとみえる。⁽²¹⁾

いずれにせよ、ここでは『野加伊之牛』が小倉実澄の和歌とならんかの関わりを持つということのみを指摘するに留めておく。現在実澄の作品、特に和歌の作品があまり

伝わっていないこと、近世においても流布していた記録のみに限らないことを考えると、ここで典拠として選択された理由や、当時の実澄作品の流通状況は、非常に興味深い問題である。

おわりに

以上、写本の女訓書『野加伊之牛』の教訓の形式と内容について同時代の女訓書と比較しながら考察し、またその典拠と考えられる作品の内、和歌への興味という視点から、『伊勢物語闕疑抄』及び小倉実澄の教訓的な和歌を取り上げ、それぞれとの関わりについて簡単に論じた。

『野加伊之牛』は豊富な引用が巧みに組み入れられた作品である。今回は和歌に関してそのほんの一端を取り上げたに過ぎないが、その他の和歌や説話、格言、漢文などの典拠の問題もまだ多く残っている。また、女訓書における女性論の変質については注で触れただけで論じなかったが、女訓書に引くに当たって、それぞれの典拠における元来の意味やニュアンスがどのように改変されているかを分析する必要がある。今後以上の問題に注意して、この作品の成り立ちを探ってみたい。

(貴重資料を利用して頂いた天理図書館に、心より感謝の意を表します。)

註

- (1) 天理図書館叢書第二十五輯『天理図書館稀書目録 和漢書之部第三』(昭和35・10月・天理大学出版部)の精神科・倫理学の項目に書誌の紹介あり。また、作品名は自跋に「か、野飼の牛の聲も折にふれは哀なるへし」とあることによると考えられる。翻刻中の□は破れ部分。
- (2) 父が娘のために書いた女訓書と考えられる作品は他にもみられる。先行するものに『仮名教訓』また寛文中の成立をうかがわせる写本のある『はなむけ草』など。以上の二点はいずれも嫁ぐに際して作られたらしい。『野加伊之牛』は一人の娘に宛てて書かれたものとはみえないが、内容には夫を持つて後の心得もある。

伊藤敬氏「『仮名教訓』考―室町時代女流文学からみて―」(『中世文学』第十六号・昭和46・5月)、松津勝雄氏「近世の女訓書における和歌」(『愛泉女子短期大学紀要』第六号・昭和46・3月)参照。

(3) 前掲松津氏論文(註2)参照。

(4) 『梅草』下巻に収められる、ある人が息子のもとへ遣わしたという十七首の教訓歌も、和歌のみを法則性なしに並べたものである。なお、形式はこのように異なるものの、『梅草』と『野加伊之牛』には、説く心得の内容に類似する点が認められ、今後注意する必要がある。

(5) 前掲伊藤氏論文(註2)参照。

(6) 百首目の解説に「中にも女人は諸方の浄土に嫌はれ」などとあるように、仏教の影響による女性観は作品中に散見できる。また、儒教的な要素もすでに現れており、さほど多くはないが、たとえば二三首目の解説には三従が説かれる。

(7) 『新古今和歌集』巻第十五・恋歌五・よみ人しらずの歌には、五句「なりぬべきかな」の形で収められる。

(8) 慶安二年以前には、古活字十行板、古活字十二行板、寛永十一年板、寛永十九年板、慶安元年板が存在する。板本については田中宗作氏『伊勢物語研究史の研究』(昭和40・10月・桜楓社)に整理されているので参照のこと。なお、寛永十九年板は寛永十一年板に板心と匡郭を付けた本とされるが、その際文章の大部分は覆せ彫りにしたものと思いきこと、字のバランスからして寛永十九年板は刊記に「風月宗智」の板元名があるものが先で、それが無いのは名を削除した後の板とみえることを上記の情報に追加しておく。また諸本に巻一と二、巻三と五の二冊に綴じられたものを散見するが、『江戸時代書林出版書籍目録集成』をみると、寛文無刊記の目録では冊数を「五」とするが寛文十年の目録以降ではすべて「二」とされているので、元は五冊に分けられていたがどこかの段階から二冊による出版が通常になったものと推測される。

(9) 内閣文庫蔵本(特116-0003)による。巻一と三の途中、巻三の途中と五の二冊に綴じられたもの。刊記「御幸町通二条仁右衛門 活板之」。大津有一氏『伊勢物語古注釈の研究』(昭和29・3月・石川国文学会)に紹介あり。

(10) 文章も同様(青表紙本系統か)で、やはり『伊勢物語闕疑抄』から写したものと考えられる。「うちそみぬへかし」の「へ」や「おほかんめり」の「ん」は補入であり、抜きにしてみればさらに近い。系統については『源氏物語大成』巻一(昭和31・1月・中央公論社)参照。

(11) なお、美濃部重克氏「テキスト・祭り・そして女訓―お伽草子の論―」(『国語と国文学』六十九・一五・平成4・5月)の指摘する「源氏物語」の「帯木」や「朝顔」に見られる女性論が色好みの対象としての女性論の先蹤をなして『伊勢物語』の古注旧注の女性評をも含めて女性論の伝統を作っているが、それが女訓書また一般の啓蒙書の世界では家庭における夫婦恩愛の生活に引き付けての女性啓蒙における手本へと変質を始める。現象がこの「堪忍」の項目でも起こっていることを指摘しておく。

(12) ただし仮名の字母は、古活字十行板・古活字十二行板・『野加伊之牛』で微妙に異なり、完全には一致しない。

(13) 前掲大津氏論文(註9)、田中氏論文(註8)、また片桐洋一氏『伊勢物語の研究』資料篇解題(昭和44・1月・明治書院)参照。

(14) 金子金治郎氏『新撰菟玖波集の研究』(昭和44・4月・風間書房)、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究』室町後期(昭和47・12月・明治書院)に先行研究あり。また佐々木杜太郎氏『小倉実澄伝』(昭和46・6月・非売品)にも資料を多く収める。これは実澄の子孫の方の関わる本である。

(15) 『犬追物語』、『笠懸聞書』など。なお管見では『笠懸聞書』に二種類あるとみえる。

(16) 彰考館所蔵の写本『教訓和歌四部 合冊』に収まる『小倉左近将監三十六首』(一首欠)は、『群書類従』所収の『江北記』と和歌の細部に異なる点があり、別系統と考えられる。「文禄四年三月廿一日」の年記あり(元の本の記載か)、「与清曰」と注があり、「小山田本」と登録にあることから小山田与清の旧蔵本らしい。

(17) 『補庵京華外集』(玉村竹二編『五山文学新集』第一巻・昭和42・3月・東京大学出版会)による。

(18) 前掲『小倉実澄伝』(註14)に影印あり。ただし前掲井上氏論文(註14)では、これを『新撰菟玖波集』(実澄作も入集)を実澄が新調した際のものとして推測している。

(19) 具体的には「箸中の長者」の話、それを受けての筆者の夫婦論(ここにも「雨夜の品定」の引用がみられる。源氏注も利用しているか)、小倉実澄作という和歌、「或人」の言う「夫婦不和の十失」から成る。

(20) 『群書類従』第二十一輯合戦部に『江北記』の翻刻があるので、三十六首全てをここに示さないが、その翻刻には多少あやしい部分があるので、以下の表記は同系統とみえる国会図書館蔵『江北記全』(無題の弓道書と合本一冊)所収のものによった。

(21) 六十五首目の教訓歌「何事もむりに先へハゆかぬ也いそかハマハれ勢田の長橋」は、『雲玉和歌抄』雑部に前半部が「ものふのやばせの舟ははやくとも」、「醒睡笑」巻之二に前半部が「武士のやばせのわたりちかくとも」の形でみえ、当時人口に膾炙していた歌を利用したものと考えられるが、ここにも「武士」という男性的な言葉を除いて女訓書にも合うように操作している様子が見て取れる。

(二〇〇七年一月二二日受理)

A Study of *Nogai-no-Ushi*

MORI Akiko

abstract

“Nogai-no-Ushi” is an instructive book for women. It consists of 100 traditional Japanese poems(waka). Most of the poems have explanations, and the explanations include plentiful quotations from many books. According to the postscript of “Nogai-no-Ushi”, a father named Masayuki wrote it for his daughters in 1649 (Keian-2). The writing have background of the fashion for instructive book for women in the early Edo period, and publications have had a genre of such instructive book for women (Jokun-mono) in those days.

With comparison with contemporary instructive books for women, the paper explains the form of “Nogai-no-Ushi” and its content, and it studies relations to “Isemonogatari-Ketsugisho”, the commentary on “Isemonogatari” written by Hosokawa Yusai, and traditional Japanese poems composed by Ogura Sanezumi, the cultured general.

Keywords : “Nogai-no-Ushi”, instructive book for women, “Isemonogatari-Ketsugisho”, Ogura Sanezumi, “Sanjyurokusyu-Waka”